

## 弾 琴 緒

### ― 明治期旧派歌人による出版事業 ―

管 宗 次

(武庫川女子大学文学部日本語日本文学科)

#### 一、はじめに

旧派歌人という学術用語がある。芝居の方でも新派というものがある。和歌の方では、旧派は和歌で、近代文学になると短歌(近代短歌)とよぶ。ちょうど、他の韻文学で、近世(江戸時代)のものは俳諧で、正岡子規による近代(明治以降)は俳句とよぶのと同じである。

では、旧派歌人と呼ばれる人々は、どのような人々で、どのような歌風であったのか、もう減んだのか、といわれれば、一言ではいえないが、今もその命脈を伝えているということができる。

例えば、今も正月に催される宮中歌会始も、「短歌会始」とは呼ばない。あくまでも、「歌」「お歌」である。菊葉文化協会編「宮中歌会始」(毎日新聞社、一九九五年四月十日刊)のなかで、岡野弘彦氏が「歌会始とその歌風」という一章のなかで「短歌」という語を使われているが、他の執筆者は誰も「短歌」という語を使っていない。「歌」なのである。ここでは、宮中歌会始のことを論ずるのではないので、もとにもどりたいが、旧派歌人と、今、学者たちが「旧派歌人」呼んでいる人々は、自ら「旧派歌人」と称したわけではなく、わざわざ旧派の和歌を詠んだわけではない。彼らは、自分たちの「歌」を信念をもって詠んでいたのである。

また、明治十年代のおわり頃から、二十年代のはじめにかけて、和歌を詠むことに対しての論争が、旧派歌人と今よばれる人々の間でもおこった。そのうち、最も名高いのは萩野由之らの「国学和歌改良論」と、それ反駁しての武津八千穂の「国学和歌改良不可論」であるが、その要旨をあげると、萩野由之は神道学者や月並歌会に参座する程度の歌人が国

学者を称することを非とした。これに対して和歌というものは伝統的に日本人の心情に適う詩の形式で、活用自在に心情や気性も表わすことができるものである、よって和歌を詠むことも神道を学ぶことも分離の体系的なものであるというのが、武津八千穂の説である。考えてみると現代短歌の難解で、現代詩と紙一重、また現代詩の範疇の内に収まったかのような短歌と短歌論には、伝統的な日本人の心を託すものとしての隔たりを感じる人が多いからこそ、現代でも普遍的な古典である万葉集や古今和歌集に根強い人気があるのではないだろうか。

江戸時代、識字層の大半は素人(専門のプロ歌人、宗匠に就くことなく)であることを自覚し、しかもそれを恥入ることなく、自らの思いをのびのびとまたは切々と三十一文字につづっている。上手下手の問題ではないのだ。

江戸時代も文化文政期、さらに天保年間ともなると、韻文学(和歌と俳諧)の享受と創作との点で、人口的には全盛期を迎えたといつてよからう。これほど国民の多くが文芸に親しむ国は、世界的にも珍しいのではないだろうか。日本国中どんな地方に行っても俳諧の宗匠や月並歌会の結社があつて、会を催し楽しみ、やがて出版にまでもつていくことを至上の喜びとしていた。

ここで取りあげる弾琴緒は明治時代の大坂を代表する旧派の歌人である。この時期に大阪と京都には旧派歌人が多い。香川景樹の流れを汲む桂園派や、富士谷成章・御杖父子の学統を引く北辺門、本居宣長の学派につらなる鈴屋門系統、他にも実に様々な歌人と流派があつたが、弾琴緒を取りあげたのには大きな理由がある。

弾琴緒は、他の旧派歌人とは大きく異なる一面があつた。それは琴緒が、近代的な活版印刷機械を逸早く取りいれて、歌集や歌書の印刷出版業に乗り出したということである。自らの歌集の出版だけでなく、編集にもあたり、編集印刷の一切、なかには序文の依頼まで取り次ぐという、さしづめ今日のエディター、プランナーにあたる役割を果たす出版人であつた。その事業の詳細は、後章に譲るとして、現在、わずかに出版された研究書のなかでは旧派歌人とだけされている弾琴緒の伝記と仕事を本稿では少しでも明らかにしていきたいと思う。

## 二、彈琴緒

彈琴緒は、摂津伊丹に弘化四年（一八四七）に生まれた。名は舜平、琴緒と称し、号を桐園と称した。大正六年（一九一七）二月十三日（木村三太郎『浪華の歌人』では十月没とある。）、七十一歳で没した。

彈琴緒の生家は、代々が醤油醸造を営む商家であったが、父の徳斎は風流人で、家人の文雅習得に熱心で、琴緒も幼い頃から書法を和田玄作に、漢字を橋本香坡に学んだ。

また文久二年（一八六二）五月、十六才の時に遠州流生花の師匠である元村左中に、生花の傍として、はじめて和歌の手ほどきを受けて、大いに感ずるところがあった。そして、本格的な指導を受けるために、伊丹の中村良頭の門に入り、正式に国学和歌を学ぶに至った。

明治維新を迎えて、彈琴緒の周辺も大きく変化し、明治五年（一八七二）に兵庫県戸籍課に奉職し、明治十二年（一八七九）には、大阪の高麗橋三丁目に移居した。これ以降、琴緒は度々、伊丹へも赴くが、大阪に居を構えることとなる。

妻の名は梅子といい、大阪の産家の医家笠原百春の三女で、中村良頭の媒酌で娶った。笠原百春は和歌を好み、中村良頭に妻と共に学んでいたため、この縁が生まれたのであった。

琴緒と梅子の間には三男一女あって、男子は皆夭逝し、娘の愛子のみがあった。彼女は能筆で、後に和歌と書とを門弟（良家の若い娘たちが嫁ぐための教養として多く通った）に教えたりもしている。

後述するが、琴緒は和歌以外に謡曲や八雲琴（二絃琴）にも長じており、明治の大阪の文雅壇には無くてはならぬ存在であり、その交流も大阪天満宮の神主滋岡従長や、玉造の大富豪佐々木春夫、神戸新聞社記者で短歌結社の稲園社を主催した小野利教など当時の雅会的主要メンバーばかりである。

琴緒の墓所は大阪夕陽丘の浄春寺にあり「釈琴緒」の法名で葬られている。本姓は、団であったが、二絃琴（八雲琴）を好んで、琴を弾ずるに因み、弾（ダン）と普通の字を姓としたようである。森繁夫編・中野莊次補

訂「名家伝記資料集成（第二巻）」には、

彈琴緒 弘化四丁未年三月十六日生

大正六丁巳年十二月十三日没 七十一歳

通称舜平、号桐園 本姓団氏 徳斎の男

法名・釈琴緒 幕所 夕陽丘浄春寺

橋本香坡、金本摩斎に漢学、元村左中、中村良頭に

国学を学ぶ、和歌を能し、八雲琴、生花、画を嗜む

著書 類題秋草集、俗語雅語、和歌千草の花、明治

五百人一首、近世三百人一首 その他多し、

などとあがっている。

国学の幕末期からの流行があつて、それまでの過激な国学思想とも異なり、ややもすれば和歌者流といささか漢学者から軽んぜられましたが、和歌と国典の研究を中心とする文人趣味的な気分に包まれた学問が広く浸透するにつれて、国学の楽器で、和歌の朗詠伴奏にむいている八雲琴（二絃琴）と須磨琴（一絃琴）は上方を中心として全国に流行していた。そうした風潮のなかでの琴緒という名の自称は、得意とした八雲琴（二絃琴）によるものらしく、真鍋豊平が須磨琴（一絃琴）で知られたのとは好一对である。八雲琴と琴緒については、別稿に譲ることとするが、八雲琴は終生、琴緒の心を慰めるものとなった。

明治二十九年（一八九六）五月九日、大阪淀川沿いの網島鮎宇楼において、桐園吟社主催として、社主彈琴緒の年賀会（数えて五十歳）がもたれた。その折には、琴緒の八雲琴の師である戸島忠琴調、彈琴緒作の八雲琴曲「三の船」が披露されている。次にその折の記をあげる。

## 謝告

社主彈琴緒年賀会に諸君より寄琴祝の玉吟を寄贈せられし短冊数は殆一千四百首有之祝詠の千代萬代を合算すれば幾億萬か算し難き程にて誠に大慶奉存可申候乍序会日の景況豫め報告仕候

会日は五月九日にして其日は天氣殊に清明なるに寒暖平和の好時候なり浪華第一の勝地淀川に沿ひたる網島鮎宇楼の大広間の大床に午前十時より祭壇を設

け天神地祇十二柱の神霊を招奉る祭主は天満神社の滋岡氏なり祭官三名附従し神饌七台を供し祝詞を奏す此間奏楽午後一時に祭典を終り暫時休息の後管弦を奏す但弦は神伝八雲琴を代用す和漢折衷

管弦

五常楽 萬歳楽 老君子 陪臚 慶徳 五曲

八雲曲 菅搔 神路山 高倉山 天御柱 五曲

外に新曲三船を終に奏す其歌は左の如し

三の船 八雲琴曲

弾琴緒作

戸島忠琴調

大井川。錦をながす。もみち葉の。にはふさかりの。行幸に御供つかへし。臣達の。船ぎほひせし。そのかみの。宮びゆかしみ。しづたまき。賤しき身にも。面影の。心に浮び。なつかしく。思ひわたれば。年ほぎの。うたげをすとて。三の船。ふなよそひして。淀川の。堤のさくら。若楓。みどり深むる。下蔭に。棹さしとどめ。風流雄は。みやびさびして。詩を。うそぶくあれば。和歌。うたふもありて。雅楽人は。笛吹ささび。手弱女は。琴かきならし。心ゆく。みやび遊びに。うきふしを。おもひわすれて。笹の露くみかはしつゝ。千代とほぎ。八千代といはひ。人みなと。酒みつぎする。けふのためしき

当日来会者八十名以上にて誠に盛会なり午後四時管弦を終り引続き兼題の詩歌及当座河辺新樹等の歌を披露するに甚多数にして大に時間を費せり六時三十分披露を終り祭場を徹す而後大床の間には住吉内記が写しし大井川行幸三船の大幅絹本巾五尺長四尺を懸て

極彩色の横物なり

祝宴を開く酒漸く酣なるに及むで謡曲仕舞及歌舞俗曲等を以て盃を勧む因て客員各歡を尽して退散せら

れしは夜の九時すぐる頃なりき  
右会日実況預め如此猶洩れたる事多けれど紙幅限あるを以て略す

明治廿九年五月 大阪高麗橋三丁目 桐園吟社

いかにも文人らしい集いで、明治期の大阪の雅会の華やかさの伝わることであるが、琴緒はこうした雅会を主催しては、和歌、謡曲、文人画（南画）、雅楽、八雲琴などの雅事を好む人々に、その雅事の披露の場を提供したことになる。

三、弾琴緒の出版事業

弾琴緒の出版事業は歌書が、その中心で、それも自らが企画編集にあつた歌集と、歌人の依頼を受けて編集から企画出版まで請け負うものとの二種があつた。

請け負う場合は、大阪を中心とする京阪神のみならず、地方の富裕な家庭の歌人で、出版の方法を知らないが出版に強く憧れを持つような人々を、その客の対象としたが、なかには遺族が故人の風流の人であつたことを誇りとし、残された詠草の編集や、追悼、追善の和歌を全国から募集して、それらを編むなどの方法もとつて出版の運営がなされた。

東京にも、すでに幾つかの旧派歌人を中心とする歌集の出版を専門とする出版社があり、和装活版本が多く出版されている。出版という経費のかかる事業が成立するのは、不特定多数の読者（購買者）がいるからではなく、歌書の場合は、俳書（雑俳を含む）や狂歌本のように宗匠のもとに結社（社中）があり、社中の構成員の門人たちによる買い支え、分担購入があつたからで、これは木版印刷（版本）中心の江戸時代には確立した方法であつた。

そして、それらの出版物の掲載作品は、門人であり、購買責任を与えられた彼ら自身の作品でもあつたから、その書籍の購入は当然のことと考へていたし、それを買わねばならぬ（経費の一部負担）というよりは、自ら進み好んで、自作（和歌であつたり、狂歌であつたり、発句であつ

たり、川柳や冠付のような雑俳の句であつたり)が出版物に載ること、印刷されることに深い喜びを感じていたから、財力さえ許せば、いくらでもという人々でもあつた。

現在も、自費出版という方法があつて、原稿と費用さえ整えれば、プロのエディターや編集企画会社の編集員が、原稿の手直しまでしてくれて出版にまで容易にことを運んでくれる。

江戸で流行した雑俳、たとえば川柳が、引札を広く配つたり、床屋や風呂屋に掲示を貼りだし、投稿一句につき何文という規約で句の投稿を募つた。大々的な広告は、川柳愛好家たちの心をくすぐり、広く大衆から集めたなかから秀句を選ぶと共に、その費用を捻出する方法に倣つて、和歌も、その方法をとるものがあつたが、印刷と製本ばかりは専門の本屋(出版社)まかせざるを得なかつたが、明治元年(一八六八)八月(葉月)十五日序本(刊行もその頃であろう)の『水穂舎年年集』は画期的なもので、編者の真鍋豊平が自ら印刷刊行するというものであつた。そして、それは年々刊行されるというスタイルで、近代文学でいうと、斎藤茂吉のアララギ叢書の年々の結社歌集に似た方式で刊行されている。

結社(社中)年々歌集の刊行というのは、幕末期にはそれほど珍しいものではなく、むしろ門人獲得と保持のためには良い方法であつたようで、今日の書道の競書の月刊誌を書道塾の先生たちが熱心に出すのとよく似ているが、自ら印刷と製本まで手がけたのは早い例といえよう。

そうしたことが可能になつたのは、木活字の使用のためであつた。江戸時代、幕府は様々な統制をしたが、出版物への統制もなかなか厳しいものがあつた。当時、出版というと木版刷がその中心であり、現在でいうと版画の要領で一枚の大きな桜材に職人が彫刻刀で一字ずつ彫り付け、それに墨をぬつて、バレンで摺師が刷りあげたものが、出版のごく一般的な方法であつた。幕府は、その出版形式のものを出版許可か不許可かの裁定検閲のなかにいれており、手で写した写本と、活字で印刷したものは検閲の枠にはいれていなかった。

そのため、幕府からみると、問題のありそうな大名家の御家騒動を扱つたり、公家方と武家方(幕府)との小ぜり合いに題材をとつた小説類(いわゆる実録物とよばれる小説類)は、みな写本で貸本屋や本屋に出廻つ

た。また、林子平の『海国兵談』も板木が没収されたのは有名だが、すぐに写本が出廻ると共に、利に聡い出版者が写本と同じ扱いを受ける木活字本で出版している。

出版事務を行うには、大阪ならば大阪本屋仲間という仲間(いわば組合)に加入せねばならないのが、当時のきまりであつたが、素人が加入することは大変に難しく加入にはコネクションも根廻しも費用も必要で簡単なものではなかつた。

そこで、真鍋豊平という国学者でもあり歌人でもあつた人物の考えたのは、幕末期流行の木活字で、自分の社中の年々歌集を出すという案であつた。出来上がった活字本は田舎くさくて、少々野暮つたが、そこが現代から見ると、えもいわれぬ味となつていく。

しかし、それまでの版本が、版画の要領で、しかも変体仮名はタテヨコの詰めが自由自在に伸びたり、縮んだりして書けるために、一行の字数も自在であつたのに対して、活字本は、一行に詰める字数に制限がある。これが、和歌の本には泣きどころであつたらしい。また、木でつくつた活字のため、活字一個ずつの伸び縮みがあつて版面に、印刷の墨のノリが濃い薄いの不均一となる。これで特に濃く強く出たところを出目というが、一昔前までの鉛活字の本でも、この出目はわずかながらあつてコトトン紙など良質の洋紙に刷られた場合、独特の味があつたものだが、現在は活字印刷の本などは皆無といつていいから、均一のボツテリとした版面の本にしかお目にかかれないのは少し残念な気もする。詩集や歌集は、出目のある活字印刷で読んでみたい気もする。

真鍋豊平の活字本(木活字本)から、活字本ならではのおもしろい組み方の例を次に少しあげてみる。

真鍋豊平の社中(結社)の社中歌集『水穂舎年年集』初編の所収和歌の一首、數田年治の和歌が、

馬宿の御子し御皇西おはせずは馬に准て鞭ましを

と活字で組まれているが、一行二十二字詰めの組み版であるから、全て仮名で表記すれば三十一音、三十一字となるのを、右のような表記になつてしまふが、右の表記では意味は取りにくい。右の和歌が『百園雜纂』という本に載っているの、ようやく意味が通じて

馬宿のみこし皇子にしおはせずば馬によそへて鞭打ましを(皇子)  
(むち)(うた)

となる。木活字本で「西」とあるのは、助動詞助詞の部分であるから、ひらかなで組んでいないと、およそ意味がわからないであらう。また、活字であるから、いわゆる誤字誤植も多く、「晴ま」を「暗ま」、「五月雨」を「五雨月」、またひらがなの「あやめ」を「あめや」など単純な誤りも多い。また、濁点半濁点も施せない。

木活字は 一個ずつが木でつくられているから、木の伸縮もあり、墨のノリ具合も違い、印刷のムラが大きい。いかにも野暮ったく、素人臭いが、編者が手許で印刷を行う私家版(プライベートプレス)としてはおもしろい本である。

この豊平の出版活動が、弾琴緒に影響を与えたのは間違いないかと思われる。ただ、弾琴緒の場合は、いかにも明治の新時代にふさわしい金活字であった。

出版物は、彈琴緒の場合、和歌や国文関係が多いが、他にも法律関係なども出版しており、明治という時代のニーズに応えた出版業務であり、出版業としても成功を収めていたのではないかと考えられる。

彈琴緒は自らが企画編集したものの他に、歌集や句集などの印刷製本の受注をしていたため、どれほどの点数の本を出版したかはわからない。その全点数はわからないが、明治四十年七月二十三日刊の『桐園詠草附録』の巻末に「桐園出版の歌集類『彈舜平編纂の雜書類』という二つの目録がある。次にあげる

桐園出版の歌書類  
彈琴緒撰輯及著述

類題秋草集  
四季戀雜

明治十四年出版  
二冊

再類題秋草週

同 二十年出版 二冊

近世三百人一首 初 四季恋雜

編 同廿二年出版 一冊

同  
二編  
同

同三十年出版 一冊

明治五百人一首 初 四季恋雜

同	二編	同	編	同廿三年出版	一冊
---	----	---	---	--------	----

和歌千種の花  
同三十二年出版  
四季恋雜  
一冊

御代の花 御題詠進歌集(自一輯) 同二十六年出版 二冊

萬代の春 大婚廿五年 毎年出版 至十五輯(十五冊)

銀婚式歌集廿七年出版 一冊  
桐園月次集 季題 公事題

詠史題 新題 三冊  
同月次競点撰歌集 自一輯

交友会競点歌集

至九輯	五冊
自一輯	

古今集	至六輯	六冊
一千年		
祝典会歌集		
三十七年		

月瀨記行

伴林光平日記

出版 一冊

明治十五年出版  
近世名家文輯  
一冊

同十六年出版 一冊  
俗言ヨリ雅言ヲ求ル書

贈位告祭式歌集	伴林 光平	二十四年出版	一冊
廿五年出版			一冊

總計四十五冊 自明治十四年  
至同三十年 製本済

桐園詠草拾遺	逐次刊行	一冊
桐園長歌集	同	一冊

桐園文章集	同	一冊
桐園雜記	同	一冊

彈舜平編纂の雜書類

明治十一年ヨリ二十年迄官令出版会社ヲ始メ書林

柳原喜兵方ニテ悉皆印刷製本シテ発行スト聞ク

民法戸籍類纂 洋本綴

十一年刊行

改正増補 戸籍類纂 初編

十四年刊

同 同二編 十五年刊

同 同三編 十五年刊

改正 戸籍取扱手続註解 十九年刊

同 同 戸籍取扱法例類纂 二十年刊

同 同 郡区吏必携初編 洋本大冊

十一年刊

同書二編上 同大冊

十二年刊

同書二編下 同大冊

十二年刊

同書三編 同大冊

十三年刊

同書初編追纂 同大冊

十三年刊

府 郡区役所一覽表

折本 十三年刊

戸長必携甲編 洋本綴

十二年刊

同 同乙編 同

十二年刊

同 同丙編 同

十三年刊

改正増補 戸長必携甲編

同 十四年刊

同 同乙編

同 十五年刊

同 同丙編

同 十六年刊

徴兵事務心得

同銅版

徴兵事務官必携

同銅版

同書追纂一

同 十三年刊

同書追纂二

同 十三年刊

徴兵 免 適例類纂

洋本綴 十七年刊

改正 徴兵規則類纂

同 十六年刊

同 同署乙編

同 十七年刊

兵事規則類纂甲

同大冊 十七年刊

同書乙編

同大冊 十八年刊

徴兵事務全書

同大冊 十七年刊

同書附録 自一至四卷

十七年刊 四冊

戸籍 徴兵 年齢計算早見表

十八年刊

陸軍刑法註釈

洋本綴 十五年刊

海軍刑法註釈

同 十五年刊

租稅規則全書	同大冊
戶長提要正編	十八年刊 洋綴大冊
同書統編	十七年刊 同大冊
議員必携	十八年刊 同小冊
大日本帝國議員必携正編	十二年刊 十六年刊
同同書統編	同
增補改正議員必携正編	十八年刊 十八年刊
同同書統編	二十年刊
學務綱領甲編	同
同書乙編	十五年刊 十六年刊
府縣學校教員俸一覽表	同銅版
杜寺必携甲編	十三年刊
同書乙編	同
社寺法令類纂正編	十三年刊 十七年刊
同書統編	洋本綴
民事訴訟類纂	十五年刊
同	十五年刊
訴訟獨判斷	同
訴訟規則類纂	十六年刊
利息制限法	十六年刊
貸金心得	同
增補改正貸金心得	十一年刊
證券印紙貼用心得	同
日本坑法類纂	十七年刊
銀行例規	折本 十七年刊
銀行○株式○米商三條例	同
實部提携	同
内外博覧會出品心得	十一年刊
共進會出品心得	洋本綴 十二年刊
官旅行必携	同
增補改正旅行必携	十三年刊
貨信證書式類纂	銅版折本
酒造規則類纂	十一年刊
日本酒釀造法	同
同	十三年刊
同	洋本綴
同	十八年刊
同	十六年刊
同	十七年刊

醤油税則類纂 同

十八年刊

酒桶満端容量早算法 十八年刊

折本

日本形船舶積算則 十七年

計六十八部 冊類七十一冊出版

猶この外にもあまたあれど。さのみはとて省きぬ。此書目中に大冊とあるは。一千頁以上の書冊なり。他は一千頁以下三百頁以上のものなりとぞ。但折本また表の類は別なり

前記の歌書類は。いまだ腐朽せざれども。後記の雑書は。法令規則の改廃によりて。今は実用になりがたく。恰も反故にひとし。されども師翁のわかきほどに物せられしものにて。書目なりともと思ひて。巻末にしるす

歌書類にして。未刊行のもの。あまたあるよしなれど。翁は門人の教授と。歌の添削にいそがしくて。脱稿せられざる故なりとき、つ。しかれども。年おひ月を重ね。つきづき上梓せらるゝなるべし

門人等再識

(原文には濁点はないが、都合上施した)

右のことによって、出版事業は明治十一年からはじめていたが、法律法令関係の書籍の印刷製本は柳原喜兵衛に仕事をusstしていたことがわかり。それらが、活字本であるが、洋綴とあって洋装本の体裁であつて、他には銅版など、明治になっての新しい体裁の出版物であるから素人の手に負えるものではなく、商業ベースや書籍の内容を考えても洋装本となるのは当然であつたろう。

逆に、和歌や発句(俳諧)は、金属活字の印刷方法を取りながら装丁は和紙を綴じた和綴大和綴の体裁が、明治になつても歌人や俳人たちには根強く好まれていたから、いわゆる和装活字本で、弾琴緒は歌書類の出版が行えた。そして、『類題秋草集』明治十四年(一八八二)が、弾琴緒の歌書出版のはじめということになる。ちょうど、時代的にも、琴緒の事業は幸運であつた。明治になつて、京都から都が江戸(東京)へ遷り、一

時は大阪遷都の議もあつたが、夢と消え、商都大阪もその力を衰えさせていたのだが、西南戦争(明治十年、一八七七)のおかげで、特需、軍需景気のため、大阪は再び息を吹きかえし、近代の商業都市としての形を再構築しつつある頃であつた。旧時代の商人と新時代の商人が共にあつた頃でもある。それらは、みな琴緒のパトロンであつた。

## 参考文献

- (1) 木村三太郎『浪華の歌人』(昭和十八年十月刊、全国書房)
- (2) 森 繁夫編・中野莊次補訂『名家伝記資料集成』(第二巻)(昭和五十九年二月一日刊、思文閣)
- (3) 管 宗次『敷田年治研究』(平成十年三月十日刊、和泉書院)
- (4) 熊谷武至『類題和歌私記』(東海学園国語国文叢書第四篇「明治類題集篇 一、弾琴緒」)(明治四十七年八月一日刊、熊谷武至発行)

## 〈付記〉

本稿脱稿後に小林強氏「架蔵短冊資料点描」(大取一馬編「中世の文学と学問」龍谷大学仏教文化研究叢書15、平成十七年十一月十日刊)所収に「弾琴緒の撰集関連の短冊の紹介」の項目などがあり、本稿には取りあげることのなかったことが多くあげられており、弾琴緒についてまとめられたものとしては是非ともここで紹介しておきたい。



## Dan Kotowo's Project

:A Publishing Enterprise by an Expert on the Japanese Classics in the Meiji Era

Shuji Suga

*Department of Japanese Language and Literature, School of Letters,  
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan*

### Abstract

This paper discusses the modern and premodern characteristics of Dan Kotowo. Dan Kotowo, a classical waka poet in the Meiji era, embarked on a modern publishing enterprise. As he not only accepted printing orders but also made publishing plans and edited literary works, he attracted attention and his business flourished in the middle and late Meiji era. Besides he was an accomplished player of Yakumo-goto, a double-stringed zither. He contributed to the way of chanting of waka accompanied by Yakumo-goto.